

氏 名	越智 良二
学位授与年月日	平成 10 年 3 月 20 日
学位論文題名	アダム・スミスの貨幣論の研究
論文審査委員	主 査 教授 高橋 久弥

論文内容の要旨

本論文は、18 世紀のスコットランドの政治経済学者、アダム・スミスの貨幣論について、その理論的特徴を、巨視的には、彼の政治経済学および自然法思想との関連において、微視的には、彼の「労働 = 本源的購買貨幣」論および「慎慮の徳性」論との関連において分析しようとしたものである。

1976 年の『国富論』出版 200 年と 1990 年のスミス没後 200 年とをひとつの契機として生まれてきたスミスに対する関心の高まりは、1980 年代以後の英米におけるケインズ主義の後退、新自由主義(新保守主義)の台頭、旧ソ連・東欧型の社会主義計画経済の破綻を背景に持っているが、本論文は、こうしたスミス研究の動向を踏まえながら、スミスの貨幣論研究に以下のような視点を取り入れたものである。1970 年代以後におけるスミスの政治学的解釈に対する批判として、スミスの政治経済学が普遍的富裕の原因分析を主眼とした経済理論的なものであったことを指摘した上で、『国富論』体系が「自然的自由の体系」であることを再確認し、その中で、スミスの貨幣論を位置づけること、『国富論』の貨幣論に関して制度論的なアプローチを試みること、『国富論』において展開されているスミスの貨幣論をできるだけ前面的に明らかにする作業を通じて、スミスの自然法思想と『国富論』における貨幣論との接点を探ること、その際、『国富論』における貨幣論と彼の倫理学との関連を探ること、以上である。

本論文は、全部で 6 章から成る。

第 1 章では、スミスの「政治経済学」の特徴を political economy の用語法

に即して明らかにし、それが「商業の体系 (= 重商主義)」や「農業の体系 (= 重農主義)」に見られるような経済政策的なものではなく、普遍的富裕の原因分析を主眼においた経済理論を意味することを指摘し、『国富論』におけるスミスの貨幣論をできる限り全面的にフォローし、その特徴点を整理して示し、そのうえでスミスの貨幣論に彼の政治経済学がどのように反映しているかを探っている。

第 2 章では、『国富論』第 1 編第 4 章の貨幣論と第 1 章～第 3 章の分業論における分業論との関連を問題にし、第 4 章におけるスミスの貨幣論が第 2 章における分業論の原因 = 交換性向論の展開上にあることを指摘している。スミスは交換性向を人間の本性 (human nature) の一部と考えており、そこに貨幣の発生を人間の自然的本性から説明しようとするスミスの自然法思想の特徴のひとつを見てとることができることを主張している。

第 3 章・第 4 章は、本論文の中で最も重要な論点を含む箇所である。第 3 章では、スミスにとって、交換に際して人間が自然に守る法則 (= 自然法) の解明の場としての真実価格論 (『国富論』第 1 編 5～7 章) の中から、第 1 編第 5 章の真実価格論を取り上げ、従来のスミス貨幣論研究において深く掘り下げられることのなかった「労働 = 本源的購買貨幣」論をクローズ・アップする。スミスは労働を貨幣視するという特異な視点を持っており、これはスミスの「利己心」論および『道徳感情論』第 4 部第 2 章における「慎慮の特性」論における「自己規制」 (= 自律) 論と密接なつながりを持ち、人間は「労働 (toil and trouble)」という「自己規制」を行うことによって「公平な観察者 (impartial spectator)」の「同感 (sympathy)」を得ることにつながるという認識を持っていると主張している。

第 4 章では、労働を貨幣視することに起因する労働のもう一つの機能である価格尺度について分析を加えている。「真実価格」と「名目価格」との関係について、スミスは「真実価格」を「労働価格」として、「名目価格」を「貨幣価格」としてとらえていること、前者が時と場所を超える普遍的な、その意味で

「真の」価格であるのに対し、後者は同一の時と所において真の価格尺度として機能するに過ぎず、その意味で「真実価格」とは言えないとスミスは考えていること、スミスが「真実価格」を「労働」に求めた根拠は「労働の価値」が不変であると考えたためであること、スミスは交換価値の真の尺度である「労働」を有形化・具体化する方法を探っており、商品の真の交換価値の名目的な尺度を「穀物の時価」に求めたことを指摘している。

第5章では、貨幣の素材をなす金銀の価値の変動に関するスミスの認識について、従来、十分な説明がなされていなかった『国富論』第1編第11章の「過去4世紀間における銀の価値の変動についての余論」を分析している。ここでは、「余論」の表題に即した形で論点を整理し、「余論」の範囲および構成を明らかにするとともに、スミスがヒュームの「機械的貨幣数量説」を否定してはいないこと、正金の自動調整メカニズムについての認識を示している記述が存在することを指摘し、「自然的自由の体系」に基づく重商主義批判の視点を堅持していると主張している。

第6章では、『国富論』第4編第1章における「貨幣不足論」に対するスミスの批判をとりあげ、そこに見られる彼の貨幣認識の特徴を探っている。スミスは、貨幣不足を、特定の経済主体によって引き起こされた偶然的な事態と見ており、銀行の対応によって防止できるものと考え、経済の安定的な進行にとって、経済主体の「慎慮の徳性」の発揮が必要な事ことを示唆していると主張している。また、スミスが批判した「貨幣不足論」の担い手は、J.ローに求めることができると主張し、それへの批判は、スミス自身の有効需要論に基づいていることを明らかにしている。

以上の考察を踏まえて、スミスは『国富論』において、人間の本性の一つである「交換性向」に関する議論を出発点として貨幣の起源を説明し、「慎慮の徳性」の一つである「自己規制」の論理を背後に持つ「労働＝本源的購買貨幣」論を媒介として、交換における自然法を説明し、労働を貨幣視する視点を打ち出すことによって、貨幣論（および貨幣制度論）を彼の「自然的

自由の体系」の中に組み込む形で、重商主義の富規定(富 = 貨幣)および貨幣政策を根本的に批判していると結論づけている。